

# 日本語母語話者に求められるプロフィシエンシーとは

## —多文化共生社会におけるコミュニケーション能力再考—

西村 美保（清泉女子大学）

キーワード：接触場面、コミュニケーション能力、やさしい日本語、メタ認知、母語話者プロフィシエンシー

### 1. はじめに

日本語教育を学ぶ大学生に、日本語教育に関する知識や技能に先んじて身に付けてほしいこととして、日本語非母語話者とのコミュニケーションにおいて日本語を調整する能力が挙げられる。日本語教育実習などの場で「語彙のコントロールができていない」といった指摘を受ける学生がよくいるが、日本語非母語話者との接触場面における母語話者側の日本語能力というのは、日本語教師が教室の中で学習者に対して使う際に限って必要なものというわけではない。現代の日本社会において、日本語非母語話者との接触場面はどこにでもありふれたものであり、日本語母語話者の誰しものが身に付けておくべきものである。これはつまり、多文化共生社会においてすべての日本語母語話者に求められるプロフィシエンシーということができる。

本稿は、こうした日本語母語話者にとって必要と考えられるプロフィシエンシー（以下、母語話者プロフィシエンシーとする）について、口頭でのやり取りを念頭に置き、コミュニケーション能力、やさしい日本語、およびメタ認知の観点から考察することを目的とする。

### 2. 接触場面におけるコミュニケーション能力

#### 2. 1 コミュニケーション能力の定義

コミュニケーション能力の定義として代表的なものに、Hymes (1972)、Canale & Swain (1980)、バックマン(1997)等の考え方がある。

Hymes (1972)の提唱したコミュニケーション能力 (communicative competence) は、社会文化的要素を考慮に入れた言語能力として最初期のものとして知られている。

また、Canale & Swain (1980)は、コミュニケーション能力を、文法的能力 (grammatical competence)、社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)、談話能力 (discourse competence) および方略的能力 (strategic competence) から構成されるとした。

一方、バックマン(1997)はテストングの観点から、言語コミュニケーション能力を、言語能力 (language competence)、方略的能力 (strategic competence)、心理・生理的機能 (psychophysiological mechanisms) および知識構造：人間社会に関する知識 (knowledge structure : knowledge of the world) から構成されるとしている。

しかし、これらの言語コミュニケーション能力の定義は、母語話者同士のやり取り、あるいは非母語話者の第二言語プロフィシエンシーを想定したものであり、母語話者側が非母語話者に対してどのように言語を調整するかという観点は含まれていない。

#### 2. 2 接触場面における母語話者側のコミュニケーション

母語話者による非母語話者に対するコミュニケーションで、特徴的なものとしてフォリナー・トークがあるが、その中でも特に教師が学習者に対してどのような話し方をするかというティーチャー・トー

クについては様々な研究がなされている。その中で、西原(1999)はティーチャー・トークを、外国人とのコミュニケーション一般における日本語運用に正確な伝達という機能を追求するための手段として応用することを提案している。(1) はっきり発音し、ゆっくり話すこと、(2) 縮約形よりも基本的語彙を使うこと、(3) 短文を使い、言い切る形を選ぶこと、(4) 接続助詞・接続詞なしで結束性を示すようにこころがけること、(5) 繰り返すこと、(6) 発話機能を明示的に示すこと、さらに (7) スクリプトや語用論的前提等への語用論的配慮が必要であるという。

一方、日本語教師ではない日本語母語話者が、日本語非母語話者とコミュニケーションをする接触場面においては、多くの障害が起こることが予想される。

山田ら(2004)は、留学生と日本人学生との日本語でのディスカッションの場面において、日本語母語話者である日本人学生による発話で、留学生の理解不足や理解の齟齬が生じた場面を大きく四つに分類し、事例を挙げている。(1) 「語彙」に関して身振りを伴った感嘆詞での言い換えが効果的であった例や、(2) 「文法構造」に関して、文構造の複雑さや文末表現としての口語的表現の多用、音韻的な縮約に対する配慮の欠如、名詞修飾節や省略等によって理解の齟齬が生じた例が見られた。(3) 「談話レベル」に関しては切れ目のない発話(「はてしな文」)や質問・前提などの働きをもつ文をどう配置するかという言語による談話展開の違いによって理解されなかったと考えられる例、そして、(4) 「文化的背景」が理解できなかつたために齟齬が起こった例も見られた。

また、宮本・松岡(2000)は、先行研究および留学生と日本人学生が日本語でコミュニケーション活動を行った振り返りから、多文化コミュニケーション能力を「行動」「技能」「認知」「情動」の4項目に分類した。「技能」の項目に関しては、「聞き返して確認する」「話題をどんどん展開する」などの言語ストラテジーと「うなづく」「アイコンタクト、ジェスチャーで意志伝達する」といった非言語ストラテジーについて日本人学生が多く言及している。

日本語教育を学ぶ学生であれば、非母語話者と日本語でコミュニケーションをする機会を多く持つ必要があることはいうまでもないが、何が原因でコミュニケーションに障害が起こるのかということを知っておく必要もある。

### 2. 3 やさしい日本語でのコミュニケーション

日本語非母語話者とのコミュニケーションにおいて日本語を調整するという意味で有効な概念に「やさしい日本語」がある。

庵(2016)は<やさしい日本語>マニュアルとして書き換え編と会話編をあげているが、会話編には「もっとも大切なことは『相手を思いやる態度』」としつつ、以下のような注意点を挙げている。(1) 説明は短く簡潔に、(2) 会話の途中で「わかりますか?」と確認する、(3) 分かっていないと感じたら、別の言い換えを行う、(4) 相手の表情や反応を見ながら話す、(5) ゆっくりはっきり発音する、(6) 資料や図を活用する、(7) 難しい単語や言い回しは使わない、その他にも、「自分だけが話すぎない」「1回であきらめない」「尊敬の気持ちで」「いろいろな質問文を作ってみる」「質問しているのか説明しているのか、はっきりさせる」「だまって相手の話が終わるのを待つ」「使えるものは何でも使おう」と勧めている。

また、野田(2014)は、『「わかりにくい日本語」を理解する能力』や「非母語話者が書いた日本語を正確に読み取る技術」が必要であると述べている。この能力は、適切に談話を構成したり文脈を読み取ったりする能力でもなく、うまく伝わらないことを別の方法で伝え直すことや聞き返したり確認したりする能力とも異なる。社会文化的要素も多少関連する可能性はあるが、音声や文字表記、文法的な面から見て、どのような誤りによってできあがった文なのか分析することができる能力である。「意図推測力」

とでも名付けることができよう。

さらに、平田(2012)は、コミュニケーションにおいて「社交性」が重要であることを指摘している。「価値観や文化的な背景の違う人びとも、どうにかして共有できる部分を見つけ」るために社交性が必要だという。第二言語としての日本語能力が低い非母語話者の発話の意図を推測し、コミュニケーションを成功させるためにも、できるだけ多くのヒントを得る必要がある。そこで、様々な面からの質問を投げかけるなどして、非母語話者から情報をできる限り引き出すようにしなければならない。そうした場合に社交性がなければ、相手に対して関心を持つこともできず、根気よく対話を続けることもできないであろう。

このように非母語話者の意図をくみ取り、多くの情報を引き出すことができる前提として、普段自分が無意識に使用している母語の日本語をやさしい日本語に変換できる能力を持っていることが必須である。

### 3. 日本語母語話者が身につけるべきプロフィシエンシーの構成要素

以上のことから、接触場面における口頭でのコミュニケーションで母語話者側に必要な「母語話者プロフィシエンシー」を、言語面と態度面に分類し、言語面では「発音・話し方」から「語彙・表現」、「文構造」、「談話」の4段階に分け、さらに Can-do の形でチェックリストにしてみると、次の表1のようにまとめることができる。

<表1> 母語話者プロフィシエンシー・チェックリスト (案)

|                           |                                    |                                    |
|---------------------------|------------------------------------|------------------------------------|
| 言語面                       | 発音・話し方                             | はっきり発音し、ゆっくり話すことができる。              |
|                           |                                    | 1回であきらめないで、繰り返すことができる。             |
|                           |                                    | 会話の途中で「分かりますか?」と確認しながら話せる。         |
|                           |                                    | 分かっていないと感じたら、別の言い換えを行うことができる。      |
|                           | 語彙・表現                              | 難しい単語や表現を使わずに話せる。                  |
|                           |                                    | 縮約形を使わずに話せる。                       |
|                           | 文構造                                | 短く簡潔に説明することができる。                   |
|                           |                                    | 名詞修飾節や省略等を使わずに話せる。                 |
|                           |                                    | 文末表現としての口語的表現を多用せずに話せる。            |
|                           | 談話                                 | 接続助詞・接続詞なしで結束性を示せる。                |
|                           |                                    | 説明なのか質問なのか等、発話機能を明示的に示すことができる。     |
|                           |                                    | 母語によるスクリプトや語用論的前提の違い等への語用論的配慮ができる。 |
| 相手の意図を推測しながら聞くことができる。     |                                    |                                    |
| いろいろな質問をする社交性を発揮することができる。 |                                    |                                    |
| 態度面                       | 文化的背景の違いに対して理解を示すことができる。           |                                    |
|                           | 相手の表情や反応を見ながら話すことができる。             |                                    |
|                           | 自分だけが話しすぎず、だまって相手の話が終わるのを待つことができる。 |                                    |
|                           | 資料や図をうまく活用することができる。                |                                    |
|                           | 相手に尊敬の気持ちを持って思いやることができる。           |                                    |

ただし、これらの行動を、できなければならないと知識として知っておくだけでは実際のコミュニケーションの場面ではうまくいかない可能性がある。そこで必要となるのがメタ認知である。三宮(2004)は、コミュニケーション活動において、聞き手の反応を予測した事前の準備や、自分のコミュニケーション活動のモニタリングのためにメタ認知が必要だと述べている。

また、コミュニケーションに対するメタ認知の構成要素は、メタ認知的知識とメタ認知的活動に分けられ、メタ認知的知識は(1)人間のコミュニケーション特性についての知識、(2)課題についての知識、(3)方略についての知識から、メタ認知的活動は(1)メタ認知的モニタリングと(2)メタ認知的コントロールからなるとされる(三宮 2004)。表1のほとんどの項目が自己を振り返るために必要なメタ認知的知識に関わると考えられるが、それらに基づいて、コミュニケーションについての点検や予想、評価などを行うメタ認知的モニタリングと、コミュニケーションについての計画や修正、目標設定などを行うメタ認知的コントロールをできなければならないということになる。

#### 4. おわりに

本稿では、日本語非母語話者との接触場面がどこにでもありふれた現代の日本社会において日本語母語話者にとって必要と考えられる「母語話者プロフィシェンシー」について、コミュニケーション能力、やさしい日本語、およびメタ認知の観点から考察してきた。

日本語母語話者、特に日本語教育を学ぶ大学生にはこれらのメタ認知的知識とメタ認知的活動を学び、日本語非母語話者とのコミュニケーションにおいて問題なく目的を達成できるようなプロフィシェンシーを身につけられるように、教育を行っていくことが必要である。

なお、どのような語彙・表現がやさしいのか、接続助詞・接続詞なしで結束性をどのように示すのか、相手の意図を推測する力はどのようにして養えるのかといったことについて、さらに検討することが今後の課題である。

#### 参考文献

- 庵功雄 (2016) 『やさしい日本語—多文化共生社会へ』, 岩波新書.
- 三宮真智子 (2004) 「コミュニケーション力を育てるメタ認知」『教職研修』10増, 38-43, 教育開発研究所.
- 西原鈴子 (1999) 「日本語非母語話者とのコミュニケーション—日本語教師の話はなぜ通じるのか—」『日本語学』18 (7), 62-69, 明治書院.
- 野田尚史 (2014) 「『やさしい日本語』からユニバーサルな『日本語コミュニケーション』へ—母語話者が日本語を使うときの問題として—」『日本語教育』158, 4-18, 日本語教育学会.
- バックマン, ライル F. (1997) 『言語テスト法の基礎』 C.S.L. 学習評価研究所.
- 平田オリザ (2012) 『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』 講談社.
- 宮本律子・松岡洋子 (2000) 「多文化コミュニケーション能力測定尺度作成の試み」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』22, 99-106, 秋田大学.
- 山田敏弘・太田孝子・宮谷敦美 (2004) 「日本語話者に対する非日本語母語話者との日本語コミュニケーション教育の重要性」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』52 (2), 1-16, 岐阜大学.
- Canale, M. & Swain, M. (1980) “Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing”, *Applied Linguistics*, 1 (1), pp.1-47, Oxford University Press.
- Hymes, D.H. (1972) “On Communicative Competence”, *Sociolinguistics*, pp.269-293, Penguin Books.